

US
Today
2019

特集

超音波検査・診断最前線

腹部（消化器）領域の最新動向を中心に

企画協力 畠 二郎 川崎医科大学検査診断学内視鏡超音波部門教授

日進月歩で技術が進歩する超音波診断装置は、早期診断・治療につながるモダリティとして、その存在感を高めています。特に腹部（消化器）領域の超音波検査は、2016年度の診療報酬改定でエラストグラフィによる肝硬度計測が保険適用となるなど、近年大きな動きがありました。そこで、6月号の特集企画「US Today 2019」では、このような動向を踏まえて、「超音波検査・診断最前線—腹部（消化器）領域の最新動向を中心に—」と題し、腹部（消化器）領域における技術と臨床の最新動向に焦点を当てるとともに、各領域のトピックスも取り上げます。

特集

US Today 2019 超音波検査・診断最前線—腹部（消化器）領域の最新動向を中心に

I 領域別超音波検査・診断・治療のトピックス

1. 循環器領域（心エコー）のトピックス

— 3D エコーガイドによる経カテーテル的僧帽弁形成術

木村 俊之 / 渡邊 望 宮崎市郡医師会病院循環器内科

弁膜症をはじめとする、構造的な心疾患（structural heart disease : SHD）に対するカテーテル治療は、その低侵襲性から症例数、デバイス数とも急速な拡大を見せており、虚血性心疾患や不整脈疾患と同様に、いまや循環器カテーテル治療の一角を占めるまでに成長した。特に、重症大動脈弁狭窄症（aortic stenosis : AS）に対する経カテーテル大動脈弁置換術（transcatheter aortic valve implantation : TAVI）は、2013年10月に日本に導入以降、これまでに8000人以上の患者に対し施行されており、高い安全性と

有効性を示している。現在、その適応は開心術の高リスク患者や高齢患者に限定されているが、今後エビデンスの確立とデバイスの進化によって、ますます拡大されていくと思われる。

ASと同じく、高齢者で罹患率の高い弁膜症性疾患が、僧帽弁逆流症（mitral regurgitation : MR）である。MRに対するカテーテル治療は、全世界で約50種類ものデバイスが開発中であるが、僧帽弁は大動脈弁よりも構造が複雑であるため、TAVIと同じような人工弁置換デバイスは、まだそのいくつかは欧米で使用可能になってい

るに過ぎない。そのようななか、「MitraClip」（アボットバスキュラー社製）は2008年に欧州でCEマークを取得以降、全世界で7万例以上の豊富な実績を有するリーディングデバイスである。2018年4月に日本でも保険償還となり、MRを有する心不全患者の新たな治療オプションの一つとして大いに期待されている。

これまでのカテーテル手技においては、X線透視画像が主たる役割を果たしてきた。TAVIにおいても、手技の大部分はX線透視画像を中心に進められ、心エコー図ガイドにおける手技が推奨されてはいるもの